あたたかく見守っていただいて

野崎一郎

たしか、昭和三十四年の秋だったと記憶していますが、ある日の午後、「講義がなかったらちょっと加勢してくれないか」と、なんの前触れもなく先生から電話をいただいた。とりあえず、バスを乗り継いで大分市滝尾の羽田に行ってみると、鍬やスコップで荒々しく削り取ったところに、石灰で複雑な線がかいてありました。発掘など初めて見るわたしには何のことか分かりませんでした。当時としては、日本で最初だったか、少なくとも極めて珍しい弥生土器の窯跡ということで注目されたものでした。

冨來ゼミに属していたわけでもない私に電話があったのには、わけがありました。当時、私は新聞部(当時は新聞会)に籍を置き、新聞作りに熱中しておりました。ある日、部屋に、先生がひょいと立ち寄って来られ、「どんなにして新聞を作っているのか。困ったことがあったら相談に来なさいよ」と声をかけてくださった。そんなことがあって、ときどきご指導をいただいたわけです。

この滝尾の発掘がきっかけになって、以後あっちこっちの発掘についてまわることになりました。それだけでなく、「教育学」専攻の私の卒業論文まで一番に読んでいただいたのも、私の誇りです。その時の論文や文章についてのご指導は、以後どれほど力になったかわかりません。

卒業して最初の赴任地が保戸島。先生に何でもよいから、写真を撮っておくようにいわれました。何のことかわからなかったのですが、いつのまにか私は民俗学に興味をもつようになっていました。その後、諸先輩に指導をいただきながら、民俗調査等に参加するようになりました。

先生は、よく民俗学のお話をしてくださったけれども、私がしていることに直接触れらることはありませんでした。独り立ちさせようという暖かいご配慮だった、といまでもありがたく思っております。